

平成 20 年度

総合的な学習の時間コーディネーター養成講座

実 施 報 告 書

香 川 県 教 育 委 員 会

はじめに

この4月から先行実施となる新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」は、時間数が大幅に縮減されております。

このことは、「総合的な学習の時間」が軽視されたのではなく、「総合的な学習の時間」における教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動の質的な充実が図るため、国語や理数等の時数を増加し、各教科で知識・技能を活用する学習活動を充実することが必要であるとの考え方からです。

「生きる力」をはぐくむために、「総合的な学習の時間」で行われている体験的な学習や課題解決的な学習は、今後ますます重要であり、今回の改訂において、これまでも大切にしてきた「探究的な学習」を行うことや、「協同的」に取り組む態度を育てることなどを明らかにして目標が定められおります。

こうした中で、「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」については、平成18年度から文部科学省の委託事業として、『学校として「総合的な学習の時間」に組織的に取り組むための企画・調整を担うコーディネーターを養成し、その成果の普及を図ることにより、総合的な学習の時間の一層の充実に資すること』を趣旨として開催しています。

本年度は、県内の小・中学校の80名の先生方を対象に、「総合的な学習の時間」の工夫改善について、講義、ワークショップ、講演の聴講など多様な形式を取り入れ、4回の養成講座を実施いたしました。

本実践報告書は、その4回の養成講座に参加した先生方の研修レポートを中心に構成しており、コーディネーター養成を目的とした内容ではありますが、各学校の今後の「総合的な学習の時間」の在り方を示唆するものであり、具体的な実践の参考になるものと考えております。

現在、各学校では、次年度に向けて、授業時数が増加する算数・数学や理科、そして小学校では外国語活動の導入のため、準備を進めていることと思っておりますが、「総合的な学習の時間」についても、本実践報告書を活用いただき、次年度の全体計画や年間指導計画を見直すなど、より一層内容の充実を図っていただきたいと考えております。

最後になりましたが、本講座を実施するに当たって、香川大学教育学部 教授 松本 康 先生、香川県教育センターには多大な御協力をいただきましたことに感謝を申し上げます。

平成21年3月

香川県教育委員会事務局義務教育課
課長 藤本 泰雄

目 次

はじめに

目 次

平成 20 年度香川県「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」実施要項 1

平成 20 年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座日程 3

第 1 回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から 5

- ・総合的な学習の時間の歴史
- ・総合的な学習の時間の現状と課題
- ・計画作成とコーディネーターの役割

第 2 回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から 13

- ・授業の実施とコーディネーターの役割 1
- ・授業の実施とコーディネーターの役割 2

第 3 回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から 21

教育講演から学ぶ

第 4 回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から 29

- ・カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1
- ・カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 2
- ・個人カルテ（抽出児の指導、抽出児の記録と評価）
- ・総合的な学習の時間の時間の計画作成とその見直し等に関する各校の取組状況
(アンケート)

平成20年度 香川県総合的な学習の時間コーディネーター養成講座実施要項

香川県教育委員会事務局義務教育課

1 趣旨

県内の各小・中学校の教員等を対象に、学校として総合的な学習の時間に組織的に取り組むための企画・調整を担うコーディネーターの養成を行い、その成果の普及を図ることにより、総合的な学習の時間の一層の充実に資する。

2 主催

文部科学省 香川県教育委員会

3 受講者

総合的な学習の時間コーディネーターとして、各教育事務所が推薦した学校の教務主任、現職教育主任、総合的な学習の時間担当者のうち、1名。ただし、4日間の講座をすべて受講できる者。

4 受講者の推薦手続等

- ・ 各教育事務所は、管内の小中学校において積極的に総合的な学習の時間を推進している学校及びその学校の受講者1名を選定し、別紙様式1により義務教育課に提出する。
- ・ 義務教育課は、推薦表受理後、受講対象校及び受講者を確認し、関係教育委員会、関係小・中学校、各教育事務所に通知する。

5 開講日

香川県教育委員会において別途定める。

6 研修講座の内容

(1) 総合的な学習の時間の意義、現状と課題に関すること

- ・ 総合的な学習の時間の教育課程上の位置付け、趣旨、ねらい
- ・ 総合的な学習の時間の現状と課題
- ・ 総合的な学習の時間におけるコーディネーターの役割

(2) 計画作成とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 全体計画、指導計画の作成
- ・ 校内体制の整備、校内組織の作り方、校内研修の進め方
- ・ 施設・設備などの学習環境の整備・活用
- ・ 地域人材の活用、地域との連携、学校外との調整の進め方

(3) 授業の実施とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 教材の開発

- ・ 指導方法や指導評価の工夫
- (4) カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割に関すること
- ・ 評価資料の収集・検討
 - ・ 改善案の作成・検討

7 研修講座の重点事項等

- (1) 研修講座は、6の(4)の「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割に関すること」を重点とする。
- (2) 実施にあたっては、演習を取り入れたり、公開授業の参観を取り入れたりするなど運営を工夫する。
- (3) 研修講座の事前事後にアンケート（意識調査）を実施し、研修講座の評価を実施する。
- (4) 受講生は、毎回の研修後に研修報告書を、研修終了後決められた期日までに実践記録を提出する。研修報告書、実践記録の様式は別途周知する。

8 経費

文部科学省は、本講座の実施に要する経費について、県に対し予算の範囲内で支出する。この経費は、県が行う国の会計事務として支出する経費とする。ただし、受講生の旅費は含まれない。

9 その他

- (1) 香川県教育委員会事務局義務教育課は、文部科学省の求めがあれば、本講座の進捗状況及び経費事務処理状況について事態調査を受ける。
- (2) 香川県教育委員会事務局義務教育課は、文部科学省が行う特に効果的な研修の事例の収集やその公開及び共有について協力する。
- (3) この要項に定めのない事項で事業の実施に必要な事項は、香川県教育委員会事務局義務教育課長が別に指示する。

平成 20 年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
第 1 回・2 回 日程

第 1 回 7 月 2 8 日 (月) 9:45～16:30 (会場 : 高松テルサ 大研修室)		第 2 回 7 月 3 1 日 (木) 9:45～16:30 (会場 : 高松テルサ 大研修室)	
時間	内 容	時間	内 容
9:30	受付	9:30	受付
9:45	開会 研修の趣旨説明 研修日程について	9:45	開会 日程説明
10:00	研修 1 「総合的な学習の時間の歴史」 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授	10:00	研修 4 「授業の実施とコーディネーターの役割 1」 ・授業実践の情報交換 ・授業実践上の課題把握 事例分析・課題把握 ワークショップ
11:00	休憩		
11:15	研修 2 「総合的な学習の時間の現状と課題」 ・次期指導要領の実施に向けて ・県内の実施状況 ・コーディネーターに期待すること 指導・助言 義務教育課 担当指導主事		指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
12:00	昼食・休憩	12:00	昼食・休憩
13:00	研修 3 「計画作成とコーディネーターの役割」 ・全体計画、年間指導計画の作成上の工夫・改善 ・計画の作成や見直しについての情報交換 ・目標及び内容 ・育てようとする資質や能力 ・指導体制 ・各教科等との関連 ・各学年間との関連 ・小中との関連 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授	13:00	研修 5 「授業の実施とコーディネーターの役割 2」 ・教材の開発 ・指導の工夫改善 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
16:30	事務連絡・閉会	16:30	事務連絡・閉会

平成 20 年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
第 3 回・4 回 日程

第 3 回 9 月 2 5 日 (木) 13:00~16:30 (会場：香川県教育会館ミューズホール)		第 4 回 1 2 月 2 5 日 (木) 9:45~16:30 (会場：高松テルサ 大研修室)	
時間	内 容	時間	内 容
12:45	受付	9:30	受付
13:00	研修 6 「教育講演から学ぶ」 (香川県教育センター教育講演) 講演 演題 (総合的な学習の時間のカリキュラム編成と授業づくり) 講師 上智大学総合人間科学部 教授 奈須 正裕	9:45	開会 日程説明
		10:00	研修 7 「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1」 ・児童生徒の評価の在り方 実践事例の情報交換 評価方法の工夫改善 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
		12:00	昼食・休憩
		13:00	研修 8 「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 2」 ・カリキュラム評価の在り方 総合的な学習の時間の評価 次年度構想案の作成・検討 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
		15:00	研修のまとめ アンケートの実施
16:30	閉会	16:30	閉会

第1回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成20年 7月28日(月) 9:45~16:30

高松テルサ 大会議室

講座の内容

- 1 講話 総合的な学習の時間の歴史
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏
- 2 講話 総合的な学習の時間の現状と課題
香川県教育委員会事務局義務教育課 担当指導主事
- 2 講話・演習 計画作成とコーディネーターの役割
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

総合的な学習の時間の歴史

講師 香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

講話 「総合的な学習の時間の歴史」

総合的な学習の時間の歴史について、現在実施されている総合的な学習の時間の設立の経緯や、合科学習総合学習、クロスカリキュラムの違い、明治期、大正期から行われている先進的取組等について講話いただいた。

ここでは、その講話内容や感想をまとめた報告書を紹介する。



◇ 研修から学んだこと

小学校・中学校の実践交流を通して、総合的な学習の時間の現状と課題を確認することができました。「生きる力」の理念を踏まえて、それを具現化する取組が計画的に実施されている学校がある反面、学校行事を中心に総合的な学習の時間の「時間」を消化している実態、現場での現実的な課題も再認識できました。

(高松市：中)

◇ 総合的な学習の時間の目的について

総合的な学習の時間の目的について深く考えたことはなかったが、最初の研修でその歴史を聞いておくことは有意義であった。もともと、生涯を通じて「自ら学び、考える」学習を行うためには、教科だけでなく、総合的な学習は不可欠であると考えていた。ただ、中学校の場合、進路指導や生徒指導上の問題などにより、十分にその効果が出ていないと思っている。どうすればより効果的に実施することができるか、この研修を通じて考えていきたいと思う。

(高松市：中)

◇ 研修から学んだこと

総合的な学習の時間が教育課程に位置づけられるまでの経緯とその背景が分かった。明治になって義務教育が開始され、教科別に目標が設定されたが、複数の教科にまたがるようなものがあるため、合科学習ができた。2教科以上の目標を同時に達成するもので、教科統合的単元を設定したものである。戦後、平和学習や人権学習などが行われるのにあたり、総合学習ができた。その後、従来の枠に入りづらいものを横断的に学習するクロス・カリキュラムが行われた。教科とくらしが繋がらないと、学ぶ意味が見えてこない。かつては家庭や地域でやっていたが、社会や時代の変化により、学校でつなげる必要がでてきて総合的な学習の時間が設置された。

(高松市：中)

◇ 総合的な学習の時間の歴史

松本先生から総合的な学習の時間の歴史についてお話を伺うまでは、十数年前から始まったこの時間の背景や実施に至る経緯について聞けるものだと考えていた。しかし、実際に聞いてみると、その歴史は古く、明治期より提唱され、実践への取り組みが行われていたということにまずは驚かされた。教育現場の現状や価値ある学習活動を保証するための総合的な学習が、歴史的にもその存在価値が認められている証拠であることも考えさせられた。また、奈良女附小や伊那小の先進的な取り組みについて聞いた中で、奈良女附小の「しごと」「けいこ」「なかよし」の価値づけや、伊那小の「子どもの意欲を育まない学習として成立しない」といったことは、大変参考になった。

(高松市：小)

◇ 総合的な学習の時間の重要性

今回松本先生の講義を受けて総合的な学習の時間は10年前に急に始まったことではなく、長い歴史があることが分かった。講義の中で最近の子どもの変化についてのお話があったが、その中で実感させられたことがいくつかあった。特に実感しているのは知識はあるが自分の意見が言えない子どもが増えているということだ。先日もある会で、最近委員会活動を子どもに任せることができなくなったということが話題に上った。教師が主導的に進めなければ話し合い活動すらままならない状況にある、というのだ。子どもたちが自分で動くことができるようになるための力を付けるには、教科のカリキュラムだけで解決することは難しく、柔軟なカリキュラムが必要、というお話を聞いて改めて総合的な学習の時間の重要性を感じた。教科の中では付けることが難しい力の育成にこの時間が大きく関わることができるのだと分かった。

(さぬき市：中)

◇ 総合的な学習の起源

総合的な学習の時間の歴史を体系的に知ることができた。各教科が分化的で抽象的であるのに対して、生活（くらし）は総合的であり具体的である。各教科は自律的な学習を実施するのは難しく、「自ら学ぶ」学習は総合的な学習でこそ実践できるのである。明治期、大正期の歴史を追って、総合的な学習の起源が古いことに驚かされた。

(さぬき市：小)

◇ 総合的な学習の時間とは何か

総合的な学習の時間の歴史や、背景、ねらいなどを改めて見直すことができた。そして、大きく膨らませすぎた「総合的な学習の時間」について、無駄な部分をそぎ落とすことが必要であるように思う。特に、「たくさんの教育課題（英語、環境福祉、情報、地域）を盛り込み過ぎたり、それらにとらわれ過ぎた」という話は、大いにうなずける。しかし、そういった教育課題を必ず入れるように、という指導を過去にされた記憶がある。だから、どの学校の年間計画にも、教育課題との関連性を示す欄が存在しているのだろう。今一度、学校で「総合的な学習の時間」とは何か、根本から考え直す時間を確保・議論を行い、職員全員が共通理解する必要がある。

(丸亀市：小)

◇ 「的」の意味とは・・・

今回の講話の中で、総合的な学習の時間がどのような学習であるべきなのか、「的」の意味を「合科学習」、「総合学習」、「クロス・カリキュラム」の違いを明確にしながら説明していただいたので大変理解しやすかった。計画の段階で、この3つが入り組んでくるような総合的な学習の時間にしていく必要性を感じた。

(丸亀市：小)

◇ 自分たちの学校での学習形態は・・・

総合的な学習の時間がどのような学習の流れから生まれ、現在に至っているかということが、よく分かった。合科学習・総合学習・クロスカリキュラムという三つの学習が各学校で、地域性や学校の実態を踏まえ行われているため、総合的な学習の時間の共通化が図りにくいという問題点もあるのではないかと思った。それぞれの学習形態によさがあるので、一概にどれがよい、こうしなければならないというものではないが、もう一度自分たちの学校での学習形態がどれが一番近く、何を取り入れていくべきなのか考える上で学ぶべきものがあった。

(坂出市：中)

◇ 学習即生活、生活即学習

「総合的な学習の時間」が始まった当時、教科にとらわれず、自分たちの知りたいことや不思議に思うことを自由に探究できる学習が導入されることに、私自身がわくわくしていた。前年度の年間計画はあったが、子どもたちと話し合いながら実態や意向を把握したいという思いがあり、年度当初のテーマ設定に時間をかけた。そのころはまだ単元化や領域の固定化がなく、過去の蓄積もほとんどなかったため、一からのスタートであることや教材研究など、計画や実践に困難はあったが、どこからでも切り込める楽しさや期待感が大きかった。

今回の研修では、固定された領域やびっしり詰まった計画の中で多くの活動を行ったとしても、「探究」や「生活との往復」がなければ学びとして残らず、「総合的な学習の時間」とは言えないということがよく分かった。学習が受身で自分の考えがもてない子が多く、応用力や活用力に大きな課題がある今だからこそ、自ら学ぶ楽しみを育てる「総合的な学習の時間」について見直していく必要があると言える。

(多度津町：小)

総合的な学習の時間の現状と課題

「総合的な学習の時間の現状と課題」として新学習指導要領の要点を中心に以下のような点について義務教育課担当指導主事から講話を行った。

ここでは、その講話内容や感想をまとめた報告書を紹介する。

講話内容

「総合的な学習の時間の在り方」 —新しい学習指導要領の実施に向けて—

- 1 学習指導要領の理念
 - (1) 「生きる力」の育成が必要とされる背景
 - (2) 理念を実現するための手立てに5つの課題
 - (3) 学習指導要領改訂のポイント
- 2 総合的な学習の時間についての考え方
 - (1) 「知識基盤社会」の背景と総合的な学習の時間が果たす役割
 - (2) 総合的な学習の時間のこれまでの取組における課題
 - (3) 改善の具体的事項
- 3 新学習指導要領における総合的な学習の時間の目標及び内容
 - (1) 目標を構成する5つの要素
 - (2) 目標の趣旨
 - (3) 各学校において定める目標
 - (4) 各学校において定める内容
- 4 新学習指導要領における指導計画の作成に当たっての配慮事項
- 5 新学習指導要領における内容の取扱いについての配慮事項
- 6 標準授業時数と移行措置について
 - (1) 標準授業時数縮減の理由
 - (2) 平成21年度からの移行措置について
- 7 「教科横断的・総合的な学習」、「探究的な学習」、「協同的」な態度の育成について
 - (1) 「教科横断的・総合的な学習」とは
 - (2) 「探究的な学習」とは
 - (3) 「協同的」な態度の育成とは

◇ 総合的な学習の時間のもつ意味

午前中の研修では「総合的な学習の時間の現状と課題」についての講話がとても参考になった。現行の学習指導要領で行っている総合的な学習の時間にどのような課題があり、新学習指導要領では何をねらっているのかがよくわかる講話であった。特に現場の教員として大きな壁にぶつかっているのが、「知識・技能を活用する学習が十分でない」「生徒の自主性を尊重するあまり、教師が指導を躊躇する状況があった」という二つの点であり、しっかりと知識や技能を習得させた上で、生徒主体の活動を行うことが大切であることを再度確認した。また、「探究的な学習」を通して課題を見付けること、協同的に取り組むことが「総合的な学習の時間の目標」の中で明確化されたことで、総合的な学習の時間のもつ意味がさらにわかりやすくなったのではないかと考える。

(高松市：中)

◇ 総合では「探究」をやる！

総合的な学習ということで、英語活動や情報教育も総合学習の時間内に位置づけているが「スキルのなことだけでは総合学習とはいえない。問題の解決や探究的な活動を通して・・・」ということを知り、実際のところ、スキルの活動が主になっているところもあるのでは、見直しが必要だと思った。では、どう具体化するのか、時間数も減り、ALTの確保も難しく、現実にはいろいろと課題があると感じた。

標準授業時間数縮減については、『総合的な学習の時間で担っていた「活用」の部分を教科で担うので、総合では「探究」をやる』という視点で、来年度の年間計画を見直さなくてはならないと思う。

(高松市：小)

◇ 未消化であること

時数削減の理由として、従来は総合的な学習で行っていた活用の部分を教科の学習に移行させるとのことであるが、個やグループで課題が異なることが多いので、実際は難しいのではないかと。

総合的な学習の時間の計画や実践に向けての準備などは教師の負担が大きい。したがって、時数は削減されても求められることは減らないのであれば他教科の時数が増える分、教師の負担はさらに大きくなるのではないだろうか。

(高松市：小)

◇ 英語活動、パソコンの見直し

総合的な学習の時間の課題として、「探究的な学習」がキーワードとなっている。ほとんどの学校で、英語、パソコンの「技能の習得」を目的とした単元が年間計画の中で位置付けられている。「英語＝総合」、「パソコン＝総合」といったイメージが現状としてある。また、補充学習の時間として都合のよい時間として扱われているという話もあった。新学習指導要領では、各教科で知識や技能を身に付け、総合的な学習の時間はその知識や技能を生かす場と考えられている。例えば、3、4年生でALTを招いて英語活動をしている場合、国際理解の内容やテーマについて考え直していかなければならない。

(丸亀市：小)

◇ 「生きる力」を具現化するのが総合的な学習の時間

新学習指導要領において、総合的な学習の時間の学習指導のポイントがよく分かった。「生きる力」を具現化するのが総合的な学習の時間であると新学習指導要領において明記されているということは学校全体で組織としてカリキュラムを組み、取り組んでいくべき重要な学習なのだと改めて実感した。

(坂出市：中)

◇ コーディネーターの必要性・重要性

教科の授業時数増のため、「総合的な学習の時間」も選択教科の時間同様いずれは無くなるのではないかと考えていたが、新学習指導要領に明記され、より「総合的な学習の時間」の学習指導のポイントを明確にすることで、従来「総合的な学習の時間」で担っていた「活用」の部分を教科が担うため縮減されたことを理解した。今までの「総合的な学習の時間」の運用を考え直していく必要性を感じると共に、コーディネーターの必要性・重要性が増してきたことが理解できた。

(まんのう町：中)

計画作成とコーディネーターの役割

自校の総合的な学習の時間の取組について、計画の作成や見直しはどのように行われているかについて各学年別のグループで討議した。その後、松本先生から、計画の作成、実行、修正の必要性についてまとめていただいた。

ここでは、研修内容や研修を受けての感想等を紹介する。



◇ 総合的な学習の時間のより効果的な運営

持ち寄った資料をもとに情報交換や実践の交流を行った。校種や学校規模、また地域の実態の違いはあるが、各校での実践の交流は大変参考になった。それぞれの学校で工夫しながら子どもに「生きる力」を付けるための具体的な報告がされ、その中で教師の持つ悩みや総合的な学習を実施して行く上での問題点についても話し合いを行った。それぞれの学校で実態の違いはあるが、学校間での実践の成果を交流することで自校の課題や問題点にも気づき、今後の総合的な学習の時間のより効果的な運営に向けて大変参考になった。

(高松市：中)

◇ 大規模校における実施上の課題

各学校が抱えている問題を共有できて良かった。自分が考えていたのと同じように、他の中学校でも総合的な学習は不評であるという意見が多かった。理由として、教員数の不足、環境面の不備などがあげられた。私が今まで赴任した学校はすべて1学年200名を超えていた。1度にこれだけの生徒を動そうと思えば、事前に十分な打合せが必要である。しかしながら、中学校では放課後に、部活動や補習で時間を取られ、できないという現状がある。学校規模の小さいところであればうまくできているという報告はあるものの、この研修で大規模・中規模校での実践を聞き、参考にしたいと考えている。

(高松市：中)

◇ 計画作成に携われる体制づくり

各中学校の総合的な学習の時間の情報交換を行った。それぞれの学校で取り組んでいる実践は、バラエティがあり参考になった。午前中の研修をふまえて課題も話し合われたが、計画実践の推進役の存在、前年・前々年の実践記録、職員構成、生徒数に対する担当教員数、準備の時間の確保、担当者間の細かな打ち合わせなどがスムーズに運営していく上で重要だと感じた。

しかし、実際には、どの学校も上記の要素がすべて十分である場合はなく、それぞれ制約を受けながら計画・実践しているのが実状のようである。特に規模の大きな学校の場合は、総合的な学習の時間の推進役が年度初めに適切な分掌に付けなかった場合は苦勞をする。やはり一度総合的な学習の時間を自分自身が運営し、見通しが持てる者、次の改善点を考えて実践している者が必要である。そして、それに加えてその者を理解しサポートするスタッフが必要だと思う。だから、各学校にはコーディネーターの資質を持った者が複数いて、じっくり計画・作成に携われる体制が必要だと思った。

(高松市：中)

◇ 年間計画の修正をどうするか

本校の年間計画は、学年毎に学習活動に合わせて、他教科や道徳との関連や付けたい力も一覧表にまとめられている。付けたい力の学年間の系統性も比較的明確になっていると思われる。

また、地域の人材や保護者の協力を得る機会も多く、ネットワークが確立している。しかし、学習活動が固定化されつつある点も否めない。年間計画が詳細にできている分、修正には二の足を踏んでしまう。年間計画を修正しやすくするには、年間計画を大きいくくりで考えて児童の興味や主体性を引き出すゆとりを保障しておくことも大切であるといえる。

(さぬき市：小)

◇ 個の追究を保障すること

グループでの話合いや松本先生の話の中で心に残ったことは、個の追究を保証するということである。総合的な学習の時間は自ら課題を見付け、自ら学び、・・・という目標があるが、学校のテーマに流され個のテーマを忘れがちになっていたことを反省させられた。子どもがそれぞれの活動の中でそれなりにテーマを見付けていけるように配慮しなければならない。つい全体テーマを押し付け、子どもがお客さんになっていたこともあったので、その中で自分なりの素朴なテーマを疑問を持って調べようとする子どもを育てなければと気持ちを新たにした。そしてテーマを欲張らず、先生が動き過ぎず、十分子どもの動きを見ながら活動をしていかなければと思った。

授業時数を減らすときに何を減らしたらよいか考える1つの考え方として中学年では国語、社会科とつなげ合科扱いにするということもできそうである。次年度の計画作成の折に配慮したい。

(さぬき市：小)

◇ 年間計画やテーマの設定の在り方

自校の取り組みや年間計画の作成、修正の方法などについてグループ討議をした。その中で年間計画やテーマの設定の在り方が話題となった。テーマは多くの場合、前年度の活動をもとに立てられる。そのため、一年の活動を教師側は横断的、総合的な活動になるよう計画しやすくなる。しかし、教師主導になりやすく、子どもの主体的、探究的活動になりにくいという問題点が挙げられた。そこで、子どもたちと相談し、5月頃に総合的な学習の時間の年間計画を作成している学校もあるようだが難しい面もある。身近なことに疑問をもち、解決していく活動を低学年の段階から経験していくことが、個の追究を保障できると松本先生の指導の中にもあった。個々に探究的な活動ができるように、学習の進行状況や子どもの様子などをしっかり記録し、それをもとに修正を重ねていき、次年度に生かしていくことが現実的であろう。

(丸亀市：小)

◇ テーマ設定を考える

総合的な学習の時間の役割の再確認を行うとともに、コーディネーターの役割を確認することができた。総合的な学習の時間が「教科」と「生活・経験」をつなぐ学習の場になるように、生徒の側からの全体テーマ設定を行えるような実践を行ってみたい。

小学校や中学校の小規模校では、地域と交流した内容の濃い実践や生徒個々のテーマに沿った実践が行われており、大変参考になった。中学校で総合的な学習の時間が有効に行われている実践例についてさらに知りたい。

(坂出市：中)

◇ 「自ら課題を見付け・・・」とは

全体交流の後のご指導の中で「全体のテーマと個のテーマ」というお話があったが、総合的な学習の時間の「自ら課題を見付け・・・」というねらいを実現するためにとても大切な考え方だと感じた。また、年間計画が先にあると各教科のように、どうしてもその通りに進めていこうとしていたので、「総合的な学習の時間の年間計画は修正が前提」というお話を聞いて、計画から活動の内容がずれていっても、児童の興味や関心に沿った形で行っていけばよいことがわかった。

学年ごとの系統性を大切にしながら、児童の興味や関心に合った活動内容を考える道筋が今回の研修で少し明らかになり、たいへん意味のある研修になった。

(坂出市：小)

◇ テーマの設定こそが課題

自分の今までの実践を振り返ってみると、テーマの設定が一番大きな課題であると実感した。学年である程度決まっているので、どうしても教師主導型になってしまっていたことを深く反省した。これからは、1つのテーマからどう発展させていくのか、ある程度子どもが自由にできるゆとりをもった計画になるように見直していきたい。

また、学校での取り組みを知ってもらうために、保護者や地域に対して、発表や発信の場を工夫していきたい。

(善通寺市：小)

◇ 定番のレポーターを増やす

地域の実態や学校規模など様々ではあったが、持っている悩みは似通っていた。1つは、地域との交流の中ですでに位置付けられているものがあり、子どもの課題意識とずれがあっても、実施しなければいけないこと、2つ目は、英語活動が「総合」の中に位置づけられたがスキル中心の学習になっていること、3つ目は現場の忙しさ故に年間計画の見直しをする時間や場がとれず、マンネリ化していることやまだまだ教師間に取り組みの個人差があることなどが出された。また、子どもたちも受け身で、自分が追究してみたいことや関心があることなどを考えようとせず、年間計画というルールの上を走っているようだ。研修1で学んだ「柔軟なカリキュラム作り」ができていないことが原因であろうと考えられる。総合的な学習で行うレポーターを増やし、実践の蓄積をしていく必要性を感じた。本校では、年度末に、修正を加えた年間計画と実践記録をまとめている。しかし、積み上げという所までは至っていない。新しく赴任した教師や担任した教師が、地域の実態や環境の情報を得たり、今までに子どもたちがどんな課題や関心を持って取り組んできたのか知ったりできるよう、「総合のファイル集」作り（計画・活動状況・ワークシート・パンフレット・子どもの作品感想など）を進めていきたい。

(まんのう町：小)

◇ 「計画・修正のサイクルを作る」こと

これから取り組まなければいけないことは、「計画・修正のサイクルを作る」と「記録を残す」ことである。年度末・年度初めに全職員が「どんな力を付けたいか どの活動を組むか」などについて情報交換をし共通理解を図る場を設けること、資料を整理し保存する場をつくりそのことを周知しておく必要がある。

(三豊市：小)



第2回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成20年 7月31日(木) 9:45~16:30
高松テルサ 大会議室

講座の内容

- 1 講話・演習 授業の実施とコーディネーターの役割1
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏
- 2 講話・演習 授業の実施とコーディネーターの役割2
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

授業の実施とコーディネーターの役割 1

授業実践上の情報交換を地区別グループ（校区内の小・中学校）で行い、実践上問題になっていること、その原因と考えられることをピックアップして付箋紙に記入し模造紙にまとめた。それをもとに、グループで話し合い意見の取りまとめを行った。

ここでは研修方法や内容、具体的にでた意見等を紹介する。



ワークショップによる研修 1

- 1 グループ編成
 - 1 グループ6名程度で今回は同じ中学校区内の小中学校でグループを編成した。
- 2 各自が授業実践上問題になっている点を書き出す。(黄色の付箋紙)
- 3 各自が問題点を受けて、その原因となっていると考えられることをグループでの話し合いの中で書き出す。(青色の付箋紙)



◇各グループのワークショップの結果

問題となっている点

< 教師の資質、姿勢、校内体制 >

- ・ねらいの捉え方が教師間でバラバラである。
- ・教師間で取組について温度差がある。
- ・教師間の話し合いやふり返りの時間が取れない。
- ・中学校では総合よりも基礎学力アップという現実があり、生徒とともにのめり込めない。
- ・総合を主担当として推進していく人がいない。
- ・学年団任せ、学級任せで全体での協力体制が整っていない。
- ・1学級に5つのグループがあれば、担任一人で5グループに関わらなければならず、個別の指導ができない。
- ・教員数に合わせてコース数が決まるという現実がある。

< 子どもの学び >

- ・情報収集力、表現力などの学力が不十分で学習が深まらない。その結果、教師主導で進められがちになる。
- ・個々の課題意識があまりない。
- ・自分の課題が見つからない子への支援。

< 時間的制約 >

- ・内容追究の時間が中途半端で深まらない。
- ・教師は多くのことを抱えており、同時にはなかなか対応できない。
- ・体験活動は多いが振り返りの時間をとる余裕がない。

< 年間計画、教材、テーマ >

- ・資料の整理ができておらず、次年度への引き継ぎが十分できていない。
- ・テーマが固定されていて主体的になりにくい。
- ・計画作成に子どもたちの発想が反映できない。
- ・計画の見直しや修正をする時間が取れない。
- ・学年間のつながり、先の見通し等が見えていない。
- ・小・中学校で学習内容が重なったり、系統的でないなど、連携が取れていない。
- ・昨年度の引き継ぎができておらず、計画の修正や改善がほとんどできていない。
- ・生徒のニーズにソフト面でもハード面でも対応し切れないことがある。
- ・計画の変更が行事や時間割などの都合でしづらい。

< 評価 >

- ・毎時間の評価ができていない。
- ・学習途中の個人の見取りが十分でない。
- ・個々の内面に迫る評価が難しい。
- ・スキル以外の評価はすぐにはできない。

< 地域との連携 >

- ・地域のことが十分分かっていない。
- ・ゲストティーチャーの話等が子どもの関心や進み方にそぐわない場合が出てくる。
- ・外部交渉には時間がかかり、担任一人では対応できない。
- ・地域とのかかわりが強まると逆に計画の変更がしづらくなる。

原因と考えられること

- ・教師に意識のずれや温度差があり、担当任せであったり面倒に思っている人がいる。
- ・現職教育で取り扱わないので共通認識をもったり教材研究を深めたりしにくい。
- ・子どもの体験不足、探究心の不足、失敗体験の不足等。
- ・小中間の連絡、連携が不十分である。
- ・育てる力が明確でなく、評価方法がはっきりしていない。
- ・地域人材の活用のシステムが確立していない。
- ・人材活用が固定化すると内容が縛られて変更が難しい。
- ・行事、生徒指導、部活動等で多忙。教材研究や共通理解のための時間が取れない。
- ・「子どもが主体の学び」の具体像が十分周知されておらず徹底していない。

◇ コーディネーターの役割とは

午前中の研修では、まさにコーディネーターの役割を具体的に知ることができた。コーディネーターの役割の中で自分が意識していなかったものを次に示してみる。

- 計画・修正・改善のしくみづくり
- 研究体制の運営
- 評価の枠組みの検討・実行
- 問題の発見と分析

上記の役割は、今までは現職教育主任や教頭先生がする仕事であると考えていただけに、コーディネーターの役割は多岐にわたることを知ることとなった。しかし、これらを機能的にコーディネートする立場の人間がいなければ、総合的な学習の時間は運営できないようなので、かなりの重責を感じる。

(高松市：中)

◇ 小学校と中学校の違い

今回は小学校と中学校の担当者の混ざったグループで総合的な学習の時間の情報交換を行った。それぞれの学校での取り組みは、小学校と中学校では大きく異なるところがある。それは、小学校は学年団で実施とはいいながら学級担任の裁量で運営を柔軟にできていることである。中学校は、1つのクラスだけ日を変えて実践できるほどの時間割上の柔軟性はない。また、小学校は学級担任制をとっているために教科の学習との関連がつけやすい。さらに児童の実態が広い視点（性格、その日の心理状態、学力の習得状況）から把握でき、児童への指示や児童の言葉の受け止めがより適切になるのだろう。中学校は、小学校のような個別のきめ細かな指導は十分にはできない。見方を変えれば、生徒の主体性にまかす部分が多くなり、その場での実態・実状に応じて臨機応変に指導する力が必要かと思われる。

(高松市：中)

◇ 付箋紙を使った意見の交流・分類・・・思考が明確に

情報交換の後、各自が問題としていること、またその原因について色分けされた付箋紙に書き出し、それをもとに全体の場で交流を行った。はじめは、問題点と原因を対にして左右に並べていたが、全体像がはっきりしないことから、「人材に関すること」「費用に関すること」「計画・実施に関すること」の3観点に分けて付箋紙を貼り直すことを通して、共通に感じている原因・問題が明確になってきた。このように付箋紙を使った意見の交流・分類は教育現場においてもよく取り入れているが、実際に操作してみて、思考が明確になっていく様子を感じ取ることができた。

(高松市：小)

◇ 問題点とその原因

話し合いの中で、計画的な取組、修正に向けての時間が不足していること、子どもの興味・関心と総合的な学習の時間の取組が必ずしも合致していないこと、どのように小・中連携を図っていくか、人材の確保はどのようにしたらよいのか、中学校における3学期の総合的な学習の時間はどのようにあるべきかなど課題が浮かび上がってきた。

(丸亀市：小)

◇ 小・中の情報交換の重要性

同一校区内の小・中学校で情報交換ができたことは、大変有意義であった。中学校の計画を作成する上で、小学校での取り組み等を把握することは絶対に必要である。このような情報を得るためにも、定期的な情報交換会が必要である。また、地域教材等には小・中共通の内容もあり、いろいろな情報の共有化も必要である。小・中連携の重要性は十分わかっているが、時間的制約も多い。そこで、各学校内でデータベース化されているもののうち、公開できるものについて、市教育委員会等のネットワークをつかい、小・中で共有するのも有効である。さまざまな情報を簡易のデータベース化（資料等をフォルダーに入れるだけ）しておくことで、必要なときに活用できるようになる。

(三豊市：中)

◇ 二足のわらじをはくとはいうが・・・

2日目の研修4は、同じ町内の小・中学校がグループになっての交流だった。これは、大変よかった。小・中の連携がとりやすく、情報交換がよくできたからである。雑談の中にこそ、有意義な情報がつまっているものである。

そこで課題になったのは、時間不足と予算不足・人員不足である。なんと市レベル・教育委員会レベルの問題が多いことか。K T法による問題解決プロセスで問題分析をしてみると、よくわかった。

また、総合的な学習の時間のみを専門に担当するコーディネーターを各学校に配置するという意見が出たが、これは大賛成である。二足のわらじをはくとはいうが、我々はあまりにも多くのわらじをはきすぎている。ぜひ実現してほしいものである。

(三豊市：小)

◇ 総合的な学習を進める上での課題

近くの中学校・小学校で構成されており、情報交換ができてよかった。問題として出てきたのは、「どのような知識を子どもたちに身に付けさせるのか」「教師の意識と年間計画」「職員間の共通理解」「地域人材とのつながり」「評価」の5点つだった。それぞれの学校によって、様々な問題があることが分かった。どの学校も、校内研修のテーマとの兼ね合いから、固定的な計画とその年度に初めて行う単元があり、学校行事や学校課題に対する時間に費やされることが多い。

解決策としては、学校行事との関連の見直しをして時間を削減すること、年度末に総合学習に向けての振り返りと次年度に向けての話し合いをし職員間の共通理解を図ること、ねらいをはっきりさせ本当の意味での学力向上をめざすことなどが挙げられた。外国語学習など、小・中学校の連携を図り、小学校で学習した内容や身に付けた力などについて情報を伝えることも大切なことだと思う。

(三豊市：小)



授業の実施とコーディネーターの役割 2

前半の「授業の実施とコーディネーターの役割 1」で明らかにした問題点や原因と考えられることをもとに改善していくべきことは何かを話し合い、全体で交流した。また、最後に松本教授より研修のまとめと「カルテの作成と利用について」の講話をいただいた。

ここでは、研修の内容と研修を受けての感想等を紹介する。

ワークショップによる研修 2

- 1 模造紙に貼った問題点と原因をもとに改善策を話し合い、書き出す。(ピンクの付箋紙)
- 2 各グループをまわって交流する。
- 3 自分のグループへ戻り、このワークショップで見えてきたこと、後期に向けての展望についてグループ内で意見交換する。
- 4 解決策の評価をKT法により評価する。



◇各グループのワークショップの結果

改善策

※KT法で分析した比較的短期間に実現でき、低コストのものを抜粋

- ・総合担当の専門スタッフを決め、実施する。(コーディネーター)
- ・子どもに付きたい力の系統性を考え、全体計画に反映させる。
- ・家庭や地域と連携し、豊かな人間関係力や体験活動の充実の育成に力を注ぐ
- ・前年度の計画だけでなく、反省点や改善点を含めて次年度に引き継ぎ、計画や実践の改善を図る。
- ・校内のデータベースの整理(計画、実践、評価、改善策、資料)を行い、地域、小・中間で共有する。
- ・現職教育の時間における総合的な学習の時間の研修を充実する。
- ・市町単位で研修を行い、小・中の連携と地域の方向性を定める。
- ・各校のコーディネーターが情報交換を行う。
- ・総合的な学習の時間の学び方(調べ方やまとめ方の例など)を示した手引をコーディネーターが中心となって作成する。
- ・生徒指導に関する問題が解決するような内容を開発する。
- ・保護者ボランティアを活用するなど人材バンクの整備を工夫する。
- ・前年度に児童生徒の意識調査を行っておき、子どものニーズに沿ったテーマ作りに努める。
- ・教師が待つ勇気を持ち、子どもたちに課題解決させる機会を作る。成果を求めすぎないということ。

ワークショップを通して

◇ワークショップを通して見えてきたこと

「時間的にすぐに解決できること、時間を要すること」「少ない予算で解決できること、多くの予算が必要なこと」を視点を改善策を考えていった。すぐに実践していけそうなことから実現が難しいものまで、多くの改善策が出された。時間のことやお金のことを気にせず改善策を考え話し合うというのはおもしろかった。もちろんすべてが実現できるとは思えないが、学校や校種を超えて話していったことは有意義だった。

(高松市：小)

◇ KT法による問題解決のプロセス

今回教えていただいたKT法による問題解決のプロセスを参考に、本校の総合的な学習の時間の問題分析を少しずつやってみることも大切であると考えている。

午後の情報交換や課題の洗い出しは、いつも一緒に小・中一貫の現職教育を行っているS小学校とT小学校の先生方と行ったので、効率よく演習を進めることができた。問題の解決策を、コストと時間で評価することを初めて知り、解決がすぐに可能なものと、可能でないものを区別するときにとっても有効な手段であることに気付かされた。

(高松市：中)

◇ コーディネーターとして果たすべき役割

後半は座標軸法を使って浮かび上がってきた問題点を時間と解決の難易度ごとにまとめていった。この活動をする中で、漠然ととらえていた問題点が整理されていった。その後、各グループがまとめた表を使いながら相互の発表・交流を行った。全部で14のグループがあるのだが、それぞれ問題点や課題は共通しているものが多いことが分かった。その上で一教師として、またコーディネーターとして何から取り組んでいくことができるのか、またしていくべきなのかを考えるきっかけとなった。しかし、やはり問題点や課題の多くは学校レベルで解決できるものは限られており、市町村や県、国レベルでないと解決できないものも多く、総合的な学習の意義とこれまでの成果を認識しつつ、先進国の中でもとりわけ教育費が少ない我が国の現実を突きつけられた思いがした。

ここまで2回の講座を受講したわけであるが、その中で今後コーディネーターとして学校の中で果たすべき役割を考えるよい機会となる講座であった。残りの講座は2回となったが、松本康教授の指導・助言をいただきながら、また、参加者との交流の中でさらに学んでいきたいと考える。

(高松市：中)

◇ 教師の姿勢、それを支えるコーディネーター

小学校であろうと中学校であろうと、学校間格差が大きいと感じた。それは、その学校の体制だけではなく、実践する教員の姿勢によるところが大きいとも感じた。受験をひかえている中学校でも、「こんな力をつけたいと教師集団が考えれば実践でき、受験に支障が出ることはない。」との話に、改めて教師の姿勢、それを支えるコーディネーターとしての資質について考えさせられた。

また、中学校区内の小・中学校で、総合的な学習の時間についての指導計画をお互いに交流しておくことが必要であると感じた。小学校同士での横の関係については、比較的、指導計画等の交流の場はあるが、縦の系統としての交流の場がこれからは求められていくだろう。子どもの9年間、さらにその後の育ちを見ていくとき、総合的な学習の時間に求められているものを見通して実践していく必要があると考える。

(高松市：小)

◇ 教師の姿勢、それを支えるコーディネーター

研修では、コストと時間の軸を中心に解決策を考えていった。結局、短時間でコストがかからず、自分たちの力で行いやすいものは、教員の意識改革という結論に達した。時間的に制約のある中、いかにして「総合的な学習で育った子は、自分たちでどんどん課題を見つけてやっていくんだよ。」といえるような子どもを育てていくかを考えていかなければならない。

(高松市：小)

◇ 短時間で、しかもコストがかからない領域

午前中に行った作業から KT 法による解決法の策定作業を行った。指導者の先生からは、いろいろな角度からその解決策を思いつく限り書き出してみましようとのアドバイスがあったものの、我々のグループではそれほど多様な考えを引き出すことができなかつた。それでも考え出した解決策を、KT 法の時間とコストの軸の中に当てはめていくと、短時間で、しかもコストがかからない領域に多く集まり、またはその逆の領域へと集中した。この作業を通して、コーディネーターとして力を発揮できるのは、低コスト・短時間の領域に入るものであることが分かり、これを講師の先生は我々に伝えたかったのだろうと予測が付いた。しかし、これを実施して行くに際しても、現場の先生方の理解と協力が不可欠であり、コーディネーターに求められる仕事の困難さも明らかになった。

(高松市：小)

◇ 負のスパイラルを正のスパイラルに

今回の研修では近い地域の先生方との情報交換を行い、とても参考になることがあった。まず、中学校では職場体験学習など、ほぼ同じ時期に活動をする場合があり、実践する際の注意点など具体的な内容をお聞きすることができた。また小学校の先生方とはこれまで交流する機会があまりなく、小・中連絡会などでも子どもたちの情報交換が中心で、学習内容について話を伺ったことがなかつたので今回驚いたこともたくさんあった。例えば小学校の総合的な学習の時間に英語の指導が行われていることや、香小研に総合的な学習の時間の部会があることなどは今回初めて知ったことであつた。香中研では教科部会・教科外部会のどちらにも総合的な学習の時間の部会は含まれていないことに改めて気づかされ、複雑な思いがした。また、この研修では、KT法を用いてそれぞれの学校から出された問題の解決法を分類したが、その解決法の中には、時間もコストも少なくてすむような身近な解決法が多くあつた。その中の一つでも二つでも実践していくことで、負のスパイラルを正のスパイラルに変えていくことができるのではないかと感じた。

(さぬき市：中)

◇ 大切なことは教師自身の意識改革

付箋紙を使って、まず問題点、その原因をグループで出し合った。次に、解決策を考え構造的に並べていった。このKT法（横軸に時間、縦軸にコスト）という問題解決プロセスは、話し合いの視点が明確になり、その解決策も時間面、コスト面から「できそうなことから始められるのは・・・」と考えるのに視覚的に分かりやすく効果的だと感じた。問題点は、大きく次の3点から出された。計画段階、児童生徒の実態、運営上の問題（地域の人材、資料活用、時間の確保、付けたい力）の面からである。解決策として様々な意見が出されていたが、大切なことは教師自身の意識改革だと感じた。教師自身が①地域への理解を深めること、②計画を欲張らないでゆとりをもたせること、③実践の記録を残し、教員が変わっても取り組みが分かるようにしておくこと、④児童の活動を見守り、教師の出番を考えることを再認識しなければならない。

私は、総合的な学習の時間の推進の中心にならなければいけないが、今は自分の学年の取り組みで終わり、学校全体を見渡しての活動が全くできていないと反省した。まずは各学年の取り組みの情報を交流し、成果や課題を共通理解する場を設け、これからの取り組みを考えていきたい。

(丸亀市：小)

◇ コーディネーターの役割

各グループごとのワークショップの内容を発表した。その中で特に考えさせられたのがコーディネーターの役割である。どんどん声をあげ、総合的な学習を活性化していく事が大切なのだということを改めて実感した。地域・外部講師を取り入れての学習であれば、やはり行政の指導を仰ぎ、協力を得なければ難しい面もあるだろう。市（県）内の総合的な学習の時間における人材バンク・学習材の共有化を図るデータベース化を進めていくなど、行政と学校が協力し合いながら進めていく必要があると思う。そのため学校は、まず、明確な学習ビジョンを持ち、実施していく体制づくりをコーディネーターが中心となって進めていかなければならないと感じた。

（坂出市：中学校）

◇ 全ての教師に熱を持たせる

総合的な学習の時間は、教師の教育観を実践する点においても、熱が入る時間であると思われるが、学級による温度差を感じている教師は、私一人ではなかった。ベテランと言われる教師が多くなっている現在、総合的な学習の時間は、どうあるべきか、価値も方法も分かっている。結局は、理想を掲げ、それに向かって実践するか否かの問題である。全ての教師に熱を持たせる役割が、コーディネーターの大きな役割であると強く思った。

（坂出市：小）

◇ 学校現場での努力に頼るしかない！のか？

近くの小・中学校でグループになり、KT法による問題解決プロセスのワークショップを行った。

問題点・原因・解決策を色別の付箋紙に書き、縦軸（コスト）、時間軸（時間）で構造化して貼り付け、他のグループからの意見も受け、解決策を再検討する。

人員不足、教材準備のための時間不足、教材開発の難しさ、カリキュラム固定化の問題、家庭・地域との連携の難しさなど課題が多かった。解決策を検討する中で、予算・人員を増やすことを望む声も多かったが、それが難しいとなると、やはり、学校現場での努力に頼るしかない！しかし、今でも多くを抱えている現場に更に負担というものもどうか？というジレンマも感じた。

講師の松本先生からは、低コスト・長期的な解決策として、大学での教員養成の充実や、教師の意識改革（いろいろな授業を見て研究する、子どもの探究を見守るだけでよいという姿勢）という方法も紹介された。

（観音寺市：小）

◇ 今年が、その変化の年である！

今、コーディネーターとして求められていることは、「学校で声を上げる。」「まずスタートする。」ことだと感じた。学校現場での課題はいろいろあるが、ローコスト、短時間で解決するには、現状の職員全員で協同するしか方法はない。そのために校内研修等を利用し、全職員による学校全体での見直しが必要だと思う。今回の研修で行った、KT法を用いるのも大変有効だと感じた。「今年が、その変化の年である。」

（三豊市：小）

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

教育講演会から学ぶ

平成20年 9月25日(木) 13:00~16:30
香川県教育センター 大研修室

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座は、香川県教育センターが実施する教育講演を研修内容とし、上智大学総合人間科学部 奈須正裕教授の講演を聴いての研修報告をもとに、総合的な学習の時間の充実を図るための方策について考えることとした。

演題

「総合的な学習の時間のカリキュラム編成と授業づくり」

講師 上智大学総合人間科学部 教授 奈須 正裕 氏

講演の主な内容

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1 総合的な学習の時間とは | 3 カリキュラムの作成 |
| 2 改訂のねらい | ①新指導要領の内容の確認 |
| ①単元構成の手順 | ②内容の扱い方 |
| ②単元構成のポイント | ③教師の意図性、指導性の発揮 |
| ③子どもの求めを扱う3つのポイント | |
| ④求めから単元を立ち上げる3つの方法 | |
| ⑤子どもが問題解決する | |

教育講演から学んだこと その1

那須先生の講演は12年前に一度拝聴させていただき、個の願いを最優先する論にいたく共感した。当時は先進校にて、一人一人課題の違う総合的な学習に取り組み、子どもの願いを具現化すべく自分なりに努力した。その結果、一人一人の個性や能力に合った探究学習の面白さや個の可能性を実感するとともに、課題の違う個に対応する限界も味わった。例えば、支援の手だて、資料、人材、時間、経費などである。

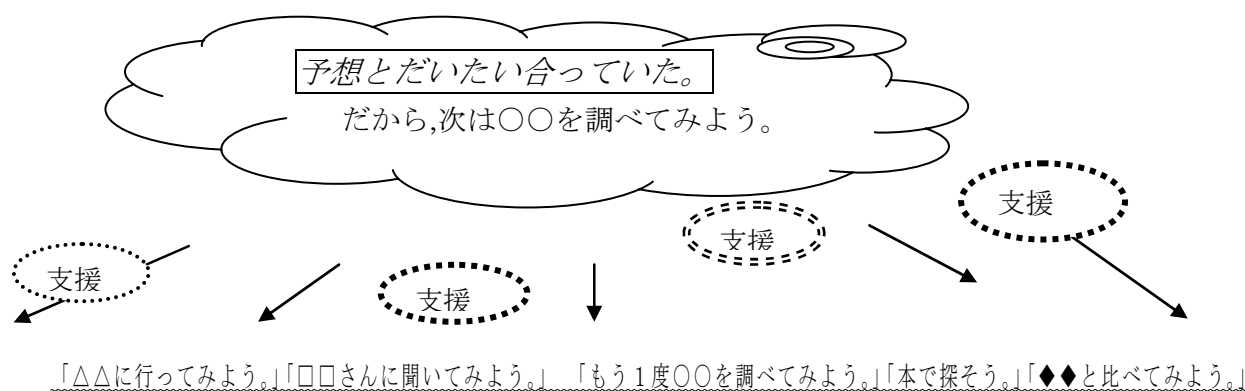
現在校に転任してからは、学年毎のテーマに即した総合的な学習に取り組むようになり、強く実感していることは総合的な学習は「確かな学力」と「きめ細かな支援」と「時間的なゆとり」のどれが不足しても成り立たないということである。特に、那須先生の持論である「時と場を与えて助言しながら焦らず見守る」方針は、これからの時数削減の時代には、よほど計画を見直して内容の精選をしないと中途半端な実践に終わるのではないだろうかと感じている。

計画見直しの段階で、「どんな子どもに育ててほしいか」を最優先し、先を見通した計画を立てなければならないと実感した。また、できれば子どもに対応できる支援者を一人でも増やすことができるとも思っている。

(高松市：小)

教育講演から学んだこと その2

- 自分の「総合的な学習の時間」の捉えが根本的に違っていることが分かったように思う。活動しながらその中で結果が発見できる。でも、その結果が必ず正解とは限らない。しかし、こちらが求めているものは失敗なく正解が出るようにと考えている。そこで、つつい教師サイドから、余分な支援が出ていたのだ。(週2時間×○週間)という限られた時間でまとめようと考えていたこと自体無理なこと。もっと子どもの立場に立って、ゆとりを持って考えるべきだと思った。このゆとりこそが、意欲の高まり・継続、学習への真剣な取り組みなどを産み出すのだと思った。
- 総合が経験單元であるということを常に頭に置いておき、教師の意図した内容につないでいくことが大切である。活動が進むにつれ、子ども達の考えていることは複雑化、進化していくことが予想される。初めの予想からだんだん結果が枝分かれしていくわけである。そうすると、子どもはいろいろなことを考え出す。



次の活動を決定する段階で、子どもの求めと教師の意図した内容につないでいくための何らかの支援が大切だと痛切に感じた。教育的価値の高いものに近づけるためにも、どのタイミングで

- ・人《だれに会うのが、子どもにとって最も効果的か?》
- ・活動《どの活動から行くと、子どもの頭の中が整理されるか?》等

教師として慎重に検討しておくことが、総合的な学習の時間の教材研究であると思う。そのためにも、職員間での話し合い、保護者との連携、地域ボランティアの協力などたくさんの方の人力が不可欠である。それとともに、毎年の実践を正確に残しておくことが必要だと思った。

(高松市：小)

教育講演から学んだこと その3

求めから単元を立ち上げる方法についてや、子どもが問題を解決する過程で、うまく成功させることが支援ではなく、失敗することによって学ぶこともある。「支援=子どもの探究を深めるハードルの調整である。」という内容が非常に印象に残った。教師の意図性や指導性を発揮するために、ねらいをしっかりと持つことや、目の前の子どもに寄り添うこと、教材研究をしっかりとすることの大切さを認識した。

本校で行われている、総合的な学習の時間についての内容や活動が、生徒の求めや主体的な問いから出発しているかどうかを、再確認し、来年度以降の内容を検討していきたい。

(さぬき市：中)

教育講演から学んだこと その4

第1回の研修時に松本先生からもお話いただいたが、今回の研修でも改めて総合的な学習の時間の歴史の古さや必要性・価値などについて実感することができた。総合的な学習では、教科とは違い、二つのカリキュラムを学校で編成しなくてはならないが、そのもととなる「経験単元」の原理は昭和33年の学習指導要領ですでに示されていた。今回の研修では、教材単元と経験単元の違いやそれぞれの特質を明確に示していただき、総合的な学習の時間のカリキュラムをこれから編成していく上でのいくつかの留意点に気づくことができた。

まず一つ目に感じたのは、「子どもが問題解決することが大切」ということだ。うまく（問題なく）成功させるのが支援ではない、という言葉が心に残った。昨年度、本校では地域学習を行い、さまざまな体験活動を行った。その中に地域に古くから伝わる伝統的なお茶菓子である「竹林糖」を自分たちで作ってみるという活動があった。自分たちで作り方を調べ実際に作ってみたがうまくできず失敗してしまった。生徒の中には竹林糖を売っているお店に行き、実物を買ってみたり、うまくいかなかったことをお店の人に話してアドバイスをいただいたりした生徒もおり、2回目のチャレンジでは、お店のものには及ばないまでもそれに近いものを再現することができた。もし、最初から失敗しないよう教師が気を配り過ぎていたら、このような生徒の自主的な活動につながらなかったのではないかと思う。また成功したときの喜びはこれほど大きくなかったのではないかと思う。1回目のチャレンジで失敗したことがかえって生徒の意欲の向上や成長につながる原動力になったのではないかと感じた。

また、二つ目に感じたのは「子どもの求め」は環境との相互作用の中で時々刻々変化するということだ。本校では総合的な学習の時間にミュージカルを初めとした表現活動を行っている。初めは教師側からの働きかけがきっかけであったが、ここ何年か続き、一種の伝統になりつつある現在では、下級生が上級生の舞台を見て、尊敬できる先輩として上級生を見たり、来年は自分も！という気持ちを持ったりすることができるようになった。また、もちろん、舞台に立ったり、その陰で役者を支えたりした生徒たちは、仲間との連帯感や達成感を持ち、自己肯定感を高めることができた。「子どもの求めは一つではない。」「深まってこそ子どもも満足する。」ということがとても納得できた。

「総合的な学習とは、くらし（生活）の勉強であり、気を確かに持って生き、今日というかけがえのない一日を充実させることだ。」という奈須先生の言葉は非常に心に響く言葉であった。そして、それは、「いつか」ではなく教師が「今」から心がけ、実践していくべきことだということがよく分かった。

(さぬき市：小)

教育講演から学んだこと その5

・総合的な学習の時間の内容やカリキュラムがマンネリ化し、画一化している気がしていた。しかし、今回の講演を聴き、脱却するヒントを得ることができた。特に、計画を立てたり反省をしたりする段階ではなく、子どもたちと向かい合っている時の心構えや考え方について、具体的な事例を挙げながら話してくださったので、大変参考になった。

・経験のないことは願わない「お散歩いきましょう」方式は、大いに賛同できる。教師が計画を立てて段階を追って学習するのでは、子どもたちが意欲的に単元に取り組めるはずがない。子どもたちの力で挑戦し、挫折して初めて問題点や視点、研究課題を子どもたちが見つけられるものだと思う。

(丸亀市：小)

教育講演から学んだこと その6

1 他教科との違い

教材単元では、内容→活動→児童という順序性があるが、経験単元では、子ども→活動→内容という順序になる。そのため活動内容を設定していく段階が難しいが、ウェビング等によって教材研究を深める方法があることを教えていただいた。そのときには、活動のまとまりが重要であり、「そば作りをしよう」という活動であれば、土作りや肥料、環境問題、食の安全、地域とのつながり等に関連付けてカリキュラムを編成していくことが分かった。

2 子どもの求めるものと教師の働きかけ

子どもの求めるものは、しばしば教師の意図したものと違ってくる。夢や願いとともに気がかりなことや心配なことも活動を考えていくときに大切である。それは、子ども自身が言語化できるとは限らないので、教師の見取りが必要になってくる。そのためには、子どもとの会話が重要である。

また環境との相互作用によって価値ある学びに結びつくものを選択しなければならない。そのためには、いろいろな出会いや経験が大切であることが分かった。

さらに、子どもへの提示の仕方にも工夫がいることを知った。年間計画を立てる場合、今まで5年生が米作りをしてきたからしようという提案では、やる気が起きにくい。売れないメニューを限定何食と宣伝するように「米作りを今年は誰がするのかな。」というような提示でやる気を起こすことも工夫の一つであるということであった。

3 カリキュラム編成に必要な視点

カリキュラム編成に必要な視点として、活動と内容を区別し、子どもをまねごとでなく本物を目指して活動させることも学んだ。豆腐を作ったら、よくできたと誉めるよりも、本物とどう違うかを考えさせてさらに活動を深めていく。そのことで内容が深まり、子どもの満足も大きなものになるということを教えていただいた。これから活動を考えていく上で、単なる活動に終わらせることのないように、内容について手段と目的を明確にしながら計画を立てていきたい。

(丸亀市：小)

教育講演から学んだこと その7

この講演を通して、総合的な学習の時間には、学校が生徒の実態に応じて、育てたい力を伸ばしていくよう支援する体制を作ることが、最も大切であると実感した。身近な疑問から課題を設定し、それを追究していきながら修正を加え、さらに、新たな疑問や気付きをもとに課題を設定するというスパイラルの構造こそが生きる力につながっていく。

しかし、そういった気付く力や課題設定、追究していく力を実際に生徒に身に付けさせることは難しい。これまでの情報交換でも、教師の力量次第だという意見が多かった。地域の力を借りて、ゲストティーチャーの活用という方法もあるが、地域の人材が不足していたり、地域自体とともに学ぼうとする姿勢がなかったりする場合には、生徒にさまざまな情報を提供することはできない。勤務校は小規模校ということもあり、学校行事の中に、総合で扱うテーマが最初から組み込まれている。毎年、同じ時期に同じことを行っているが、これをなんとか新しい方向に少しでも変えていく必要性を強く感じている。

(坂出市：中)

教育講演から学んだこと その8

今回の講演から、総合的な学習の時間のカリキュラム編成や授業づくりで大切なことが分かった。

それは、児童が、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考えるために教師が支援する必要があることである。授業は、教科のような教材単元（内容 活動 子ども）ではなく、経験単元（子ども 活動 内容）で単元を作る。経験単元とは、児童生徒の当面している問題を中心にして、その解決に必要な価値ある学習活動のまとまりから成っている単元である。活動が単元名となり「〇〇しよう」のようになる。しかし、児童は、自分の求めをすべて自覚化、言語化できるとは限らないので教師の見取りや普段の会話が重要である。子どもの求めは1つではないので、価値ある学びに結びつく見込みのあるものを選択的に取り上げることが教師の支援として大切である。また、単元を立ち上げる際に、学年の定番メニューを例として挙げる場合があるが、「今年はこれをしなくてはいけない。」というように教師が話す子どもの意欲は低下し、子どもたちの課題ではなくなるので、例えば会食サービスをしようとする場合は、一度施設を見学するなど意欲が高まるようにし、自分たちの意志で始められるようにすることが大切である。また、単元を考える際、題材を見つけに児童と散歩に行く場合があるが、「あそこで畑の仕事をしている人がいるね。ちょっと何を作っているか話を聞いてみようか。」というように、偶然出会ったように見せかけて、実は事前に畑の人に頼んでおき、出会いを仕組むことも教師の支援として大切であることが分かった。どのタイミングで誰に出会わせるかは教師の支援としてたいへん重要であり、慎重に検討する必要がある。しかし、うまく（問題なく）成功させるのは支援ではない。それは、児童はうまくいかない、困る、失敗する時によく学ぶからである。教師の支援とは、子どもの探究を強めるハードルの調節にあることが分かった。

今回の講演の中で印象に残った言葉がある。それは「総合的な学習の時間は、どんなふう生きていけばよいのかを考え、よりよい生き方を求める時間である。ぼんやりしていると毎日がだらしなく過ぎていく。気を確かにもって、自分らしく生きることが大切である。今日が充実していれば、一生充実して生きていける。」という言葉だ。わたしは、平和な日本という国でぼんやり生きているように思う。実は、今の社会はいつまでも続くという保証はないし、スーパーマーケットの棚には食の問題が山積みになっている。自分自身ももっとくらしに対して興味をもって生活を見つめ直したり、生き方を振り返ったりして、児童との授業の中で生かしていきたいと思う。

（坂出市：小）

教育講演から学んだこと その9

総合的な学習の時間の内容は、子どもの願いが重視されるべきである。しかし、これは決して「子どもたちの求めるもの＝享楽を無条件に受け入れること」ではない。子どもがより主体的にかかわれるであろう内容と出合わせたり、引き出したり、仕組んだり、時にはうまくいなくて困る体験をつくったり、その際、子どもの探究心を強める言葉をかけたり、ヒントや物を与えたり、全力を出し、友だちと協力すれば何とか解決できるようハードルを調節したり……。そのような教師の技術や能力こそが求められよう。

共に過ごす子どもたちの一瞬一瞬に、適切な支援ができるよう心を研ぎ澄ましておくとともに、長いスパンで活動を見通し、計画を練り直せる柔軟な心をもつ教師でありたい。

（坂出市：小）

教育講演から学んだこと その10

講演会に参加して、総合的な学習というのはとても魅力的な学習だなと感じた。子どもの問題意識から出発する学習活動は、先が見通せず、何をそこで学ばせるべきなのか考え学習計画を立てるなど、教師の腕にかかっていることが多く、少し負担に思ってしまう学習だなと思っていた。しかし、とても分かりやすく具体的に総合的な学習の授業づくりや学習のコツなどを話していただいて大変参考になり、私自身も総合的な学習の時間を楽しみたいと思った。

人はよりよく生きていきたいと願うもので、課題解決に向けて進んでいけばそこから新たな課題が見つかり、また課題解決へと質の高まる繰り返しの活動を通して、自己実現を目指していく、これがまさしく総合的な学習の時間のねらいであると聞き、納得すると同時に、総合的な学習の時間の役割を改めて強く感じた。

単元を構成するにあたり、子どもの思いから活動に結びつけ、その活動の中で教師の意図する内容へとつなげることが大事である。しかし、子どもは自分の思いを言葉で表すのは難しい。そこで、子どもと会話することなどを通して思いをくみ取り、その思いをもり立て、学習への意欲を持続できるようにしたい。どの子にも思いはあるはずで、それを満足させてあげたい。教科書のようなものがないだけに、教師にとって工夫のしがいのある学習だと思う。この活動を通して何を学ぶことができるのか、発達段階に応じたねらいをしっかりともち、活動だけに終わらないように気をつけたい。

本校では、年度末に、本年度の実践を踏まえ、総合的な学習の時間のテーマをあらかじめ決めている。新年度に入りそれに基づき、細かな活動内容を子どもたちとともに考えていた。教師側の意図する活動につなげられたなら、資料もあるし、どんな流れで子どもが学んでいくのかも予測できるので、子どもの思いを考慮しながらも教師の意図する活動へと導いてしまっていた。学校で決めた学習課題に対してのおおまかなテーマと学ばせたい内容さえしっかりもっておけば、活動がどうなろうと指導・支援の工夫で最終的には意図することにつながると思う。子どもの思いを、活動そして内容に結びつけるための教材研究をしたり、目の前の子どもの活動の様子から柔軟に考え支援を工夫したりしながら、自分自身も総合的な学習の時間を楽しみたい。

(坂出市：小)

教育講演から学んだこと その11

<今後の実践に生かしていきたいこと>

- 総合的な学習の時間では、子どもが問題解決することが大切である。うまく（問題なく）成功させるのが支援ではなく、うまくいかない・困る・失敗する時によく学ぶことができる。支援とは、子どもの探究を強めるハードルの調整をすることである。
- 活動が社会現実での営みに近づくほど、学びが深まる可能性が高く、本物を目指すことができる。
- 教師の意図性・指導性を発揮し、ねらいをはっきり持って、目の前の子どもに寄り添うことが大切である。（ねらいや見通しを持っている方が、子供がよく見える。）

(善通寺市：小)

教育講演から学んだこと その12

1 「事前準備はிரらない、これを考えるから（総合的な学習の時間の取組）できない。」
今回の講演でまず印象に残ったことばである。自分が教科指導をするときには、目標から学習内容を考え事前準備を行う。それなりにできていると思う。だが、「総合的な学習の時間」の計画になると、目指す生徒像から、ねらいなどを考慮し学習内容を考える。実践に向けた事前準備を行っていくとなると、スムーズに問題なく課題に取り組みせたいと考える。ことばでは、「生徒に失敗させることが教育することにとって大切である。」ということにはわかっているが、時間の制限等の理由付けをし、教師が用意周到に事前の準備をしないと課題解決が難しいと考えることが多い。しかも、その時間ばかりがかかる。実践してみれば、教師主体であり、生徒にとって本当の「総合的な学習の時間」になったか疑問が残ることが多い。かといって、講演の中でもあったが、生徒に任せっぱなしでは、経験のない生徒から新たな発想や展開を望んでもなかなか出てこない。また、インターネットを利用し検索したり、他校の実践を参考にしたりする等といっても、なかなかそれを実践に移すためにどうすればよいかなど考える時間的なゆとりも少ない。生徒にとっても先の見えない不安もあり、テーマ設定も支離滅裂でなかなかまとまったものにするのができにくいのが現実である。

2 単元構成（教材単元・経験(生活)単元）

学生の時に学んだはずだが、経験単元ということば自体を忘れていた。生徒の直面している問題を中心に、その解決に必要な価値ある学習活動のまとまりである。改めて、この経験単元を適切に設定していくことが、活動への意欲を高め成果を上げるための「総合的な学習の時間」にするために大切な単元構成であることがわかった。

3 この講演から総合的な学習の時間について、以下のことを再認識した。

① 生徒の実態把握が大切であること。

普段から生徒一人ひとりの観察をし、生徒の現状や実態に合わせた取り組みを考えていくことが大切である。また、そのための観察力を身につけておくことも大切である。それをもとに目指す生徒像やねらいを定めていく。

② 学校の地域性や環境等を考慮し特色を考えた内容にすること。

すばらしい自然環境に恵まれているが、当たり前環境であるため気づいていない生徒が多い。普段からその地域で生活している生徒には気づかないことが、他の地域から見るとすばらしい環境がある場合がある。元々ある題材や内容を見直したり、地域の特色を大胆に取り上げたテーマの設定が大切である。

③ 教師の指導力の向上が必要であること。

せっかくの題材や教材・環境があってもそれを活用し教材として生徒に提示し意欲を高める教師の指導性を身につけることと考える。

④ 教師間の共通理解。

「総合的な学習の時間」を進めるに当たって共通理解も大切な要因であると考えます。

(まんのう町：中)

教育講演から学んだこと その13

「総合的な学習の時間」とは…、今回の改訂をふまえ、詳しくご講演いただいた。総合の時間は「生き方を探究し、実践する学びの時間」であること。日々、私たち（子どもも大人も）は、ぼんやりと生活しているから、どこが問題なのか、今、何が必要なのか見えていないことが多い。アイデア商品誕生の話聞いてみると、日常の何気ないことや場面で「あれ？」と思ったり、思いついたりしたことを、商品化に結びつけているようだ。探究心や意欲をもって何度も試行錯誤しながらの地道な作業であったことだろう。さらに、その探究心は「よりよいものへ…」と高まっている。大事なことは、探究心を持ち続けることや実現させる実践力だ。とは言え、「日々の生活から問題や課題が見つかるのだろうか」「毎日、生活するだけで精一杯…」というのが本音である。その教師のマイナス思考は子どもたちにすぐ伝わる。奈須先生が講演の中で次のようなことを話されていたのが心に残った。

子どもは夢を追うものである。教師も夢を追う。大人に夢がないから、子どもも夢がない。教師の背中が教材である。

(まんのう町：小)

教育講演から学んだこと その14

全体的におもしろい話だった。前2回の研修で分からなかったことが、少しみえてきた気がする。総合的な学習の時間は、子ども主体で、子どもの求めに応じて、展開していかなければいけないということは、前回までで分かった。しかし、そうすると今年度は、どんな内容を取り上げるかということが、むずかしくなる。前学年と同じものでいいのか、学年ごとに決まった内容でいいのか、果たして、それは、子どもが本当にやりたいことなのだろうか、と考えていくと、今年は何をやるかということに十分時間をとって、子どもたちと話し合うことが大切になってくると思われる。とても時間と労力があるなあ、やる前から疲れたという感じであった。

そこに、この講演である。まさに目からうろこである。発想の転換が大事だったのである。つまり、教師のやりたいものでよかったのである。それを、いかに子どもが求めたように仕向けていくかである。わざとに仕組んでおくのも必要であろう。教師が投げかけて、環境を整えていく。あの手この手で子どもをその気にさせ、やる気を引き出させる。そこが、教師の腕のみせどころである。好きこそ物の始めなり。教師が楽しくなければ、子どもも楽しくない。教師のやる気が子どもにうつるということである。こうなればしめたものだが、子どもがのってこないこともありうる。そのときは、仕方がない。いさぎよくあきらめることである。そして、次を探す。決してあせらず、時間をかけてじっくりやることである。しかし、それだけで1学期が終わってしまってもいいのだろうか。疑問はつきない。こういった次々に出てくる疑問を解決していくことが、まさに総合的な学習の時間なのかもしれない。

(三豊市：小)

第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成20年 12月25日(木) 9:45~16:30
高松テルサ 大会議室

講座の内容

- 1 講話・演習 カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏
- 2 講話・演習 カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 2
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

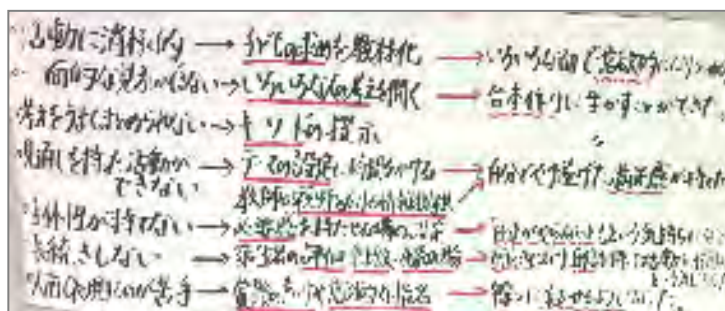
カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1

第2回の研修講座(7/31)で指導いただいた個人カルテについて、抽出児の「とらえ」、抽出児の成長への「ねがい」、そのための具体的「てだて」と、2学期以降の抽出児の「記録と評価」を持ち寄り、児童生徒の評価の在り方について情報交換と評価方法の工夫改善についてワークショップ型研修を行った。

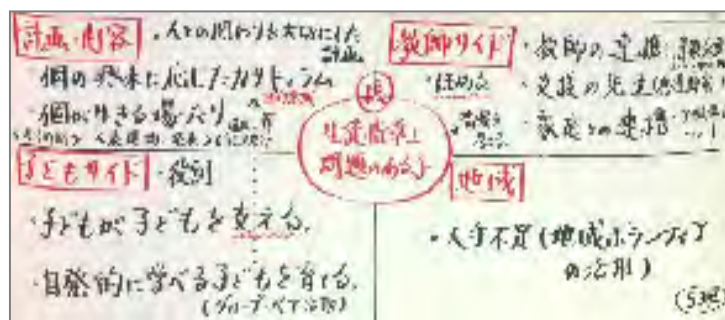
ここでは研修方法や内容、及び具体的にでた意見等を紹介する。

ワークショップによる研修 1

- 1 グループ編成
1 グループ6名程度で今回も同じ中学校区内の小・中学校でグループを編成した。
- 2 抽出児の指導及び記録と評価等について資料を基に発表し、その都度質疑応答する。
- 3 児童生徒の評価の在り方について「どんなことに気付いたか」「どんなことが問題になってきたか」について話し合いを行い、模造紙にまとめる。



↑↓評価の在り方についてまとめられた資料



←ワークショップの様子

◇各グループのワークショップの結果

気付いたこと、問題となってきた点

- ・活動から逃げる子にどう働きかけるか。
- ・授業途中の評価をどうするか。
- ・自己表現しにくい子、自己肯定感の乏しい子、自己中心的な子にどう関わっていくか。
- ・目立たない子、問題行動を起こす子、支援を要する子にどう関わっていくか。
- ・保護者や地域をどう巻き込んでいくか。
- ・一人一人を把握し対応していくための工夫は。

改善点

自己肯定感を持たせる

- ・失敗体験も経験させ、生かしていく。
- ・活動内容、表現活動に活躍の場を設定する事で居場所作りに努める。
- ・こだわりやよさを生かし、認める。
- ・様々な活動や体験を通して達成感や学ぶ喜びを実感させる。
- ・自己決定の場面を設定しその意思を大切ににする。
- ・活動において一人一人に役割を持たせ、活躍をしっかり褒める。
- ・興味のある学習に取り組ませる。
- ・気になる子を中心とした意図的なグループ編成を工夫する。

地域や異校種間との連携を図る

- ・個の育ちについて学年間の連携を密にする。
- ・生活科と小学校の総合、中学校の総合の連携を図る。
- ・地域ボランティアの活用を図る。

計画、内容の工夫

- ・学年段階に応じたスモールステップの学び方を分析する。
- ・子どもの実態にそったカリキュラムを設定する。
- ・テーマ設定に時間をかけ、個の興味に応じたカリキュラムを工夫する。
- ・子どもの求めを教材化する。

ワークショップを通して

◇ 言葉遣いや行動によい変化が・・・

各校が抽出した児童生徒は人間関係を築くことができにくく、自己表現がうまくできない子が多かった。グループ活動などではうまく活動に参加できなかったり、他の児童生徒への言葉がきつかったりなどの問題もあった。その中で、児童生徒は外部講師を招へいし、講話などをしてもらおうと、講師に手紙を書いたり、話しかけるようになったりと、とても積極的に取り組んでいるようである。小規模校では、新しい人間関係は重要で、効果的な刺激や変化を与えることができる。少しずつではあるが、言葉遣いや行動によい変化が見られたようである。授業は抽出した生徒だけでなく、その他の児童生徒にとっても変化のあるものでなければならない。しかし、抽出した児童生徒に変化が見られれば、そこから波及効果が生まれることも十分考えられる。

(土庄町：中)

◇ カルテ作成の目的は・・・

午前の研修ではグループ毎に、持ち寄った資料を基に発表と話し合いを行った。個々の児童生徒について作成したカルテを使ったものである。グループ内での情報交換や討議の後、各グループの発表を行った。前回の研修の最後に課題として出されたカルテ作成の目的はいくつかあるが、その一つは子どもへのイメージの固定化を破ることである。カルテを書くことで子どもに対する固定観念が消えてゆき、それが教師自身の自己変革につながる。そしてより質の高い授業をめざし、ひいては子どもの成長につながるというものである。総合的な学習のみならず、すべての教育活動は子どもの成長のためにあるのであり、そのための有効な方法の一つであると感じた。

(高松市：中)

◇ 「黙っている子どもも考えている」ことをどう評価するか

中学の理科の授業における取り組みを聞いて、単元構成を子ども主体で考えることの大切さを感じた。子どもがやりたいことから課題づくりをし、子どもの発言をたくさん受け止め、純粋に気付いたことから教科書通りではない発展的な学習を進めることができ、「学び合おう」「こんなこともやりたい」という意欲が高まっていた。

評価のポイントとして、結果が違っても途中の過程を評価していた。そのためには、個々に対する教師のねらいが明確でなくてはならないと感じた。また、評価方法として、表現物による評価が多くなってしまいがちだが、「黙っている子どもも考えている」ことをどう評価すればよいのか、課題になった。表現方法の差によって評価が変わってしまうからである。話すのが苦手な子、書くのが苦手な子が表現しやすいように話形を示したり、書きやすいワークシートを用意したりするのも手だての一つだと思った。

また、小学校の指導を中学校につなぐためにも、子どもを客観的な見方でとらえ、様子や指導の在り方を伝達することも大切だと感じた。

(高松市：小)

◇ 今まで気付かなかった子どものよさ

各校2名ずつの抽出児について、カルテをもとに指導実践の情報交換を行った。どの先生方も人間関係づくりの苦手な子どもや学習活動に消極的な子どもを抽出児として取り上げており、そのような子どもたちに対しての指導方法や評価の仕方について話し合った。指導方法については、人間関係づくりの苦手な子どもに対しては、グループ学習や地域の人との交流を通して、人との関わり方を身に付けさせていく必要がある。また、学習活動に消極的な子どもに対しては、その子の興味や関心のあることに取り組みせたり、役割や学習の中での出番を意図的に与えたりして、自分に自信を持たせるなどの意見が出された。評価の仕方については、大勢の子どもたちの中では一人一人を正確に見取ることが難しい。どうしてもワークシートに頼りがちになる。活動の中で子どものつぶやきを正確に拾えているか不安であるなどの問題点があげられたが、カルテを作成することにより、今まで気付かなかった子どものよさを発見できたという意見も多くあった。

(東かがわ市：中)

◇ カルテの効用

今回の研修では、抽出児のカルテをもとに個のレベルでの変容について気づいたことを話し合う活動を行った。午前中はグループ討議で、私はS市内の5小学校と1中学校の先生と話し合った。グループでの話し合いで分かったことは2点あった。一つ目は、抽出児として教師から選ばれている児童は、友達との関わりで気になる子か内容面（対象に興味がちにくい等）で気になる子のどちらか、もしくは両方気になる子であるということである。二つ目は、カルテを用いて個を見つめることで、年度初めに立てた計画カリキュラムと活動を通して児童が残した足跡カリキュラムのギャップ（ずれ）に気が付くことができ、ギャップに気が付くことで計画を適切に修正することができるということである。

（坂出市：小）

◇ カルテの作成・・・複数の視点からの評価の大切さ

前回の講座の課題として抽出生徒の個人カルテを作成した。その生徒をどのようにとらえているか。どのように育てて欲しいか。そのために、どのような指導をしたらよいか。という3点について考え作成した。改めて、生徒をじっくりと観察し記録することの大切さを実感した。また、抽出生徒以外の生徒についても、より一層個々の言動を注意深く観察することができた。

小学校と比べ、中学校では教科担任制であるため、個々の生徒と接する時間は少ない。そのため一人の教師の観察だけで個人カルテを作成したため結構苦勞した。そこで、学級担任、教科担任や部活動の顧問等複数からの情報提供が大切であると考えている。そうすることによって様々な視点からの個の評価を見取ることとなり、指導に生かせる生きた個人カルテの作成ができる。これは、中学校であることの利点ではないかと考える。今後、個々の生徒に対する指導の情報の共有化が大切になる。その方法としてコンピュータによる情報管理等の工夫を考えていく必要があると考える。

（まんのう町：中）

◇ 総合的な学習の時間の目的を再認識

各校の実践事例の情報交換では、抽出児童生徒への、具体的支援の方法や変容ぶりが報告された。抽出生徒に対して、「とらえ」「ねがい」「手だて」を書き、カルテをつけることによって、一人ひとりをより深く見つめることができていた。また、小学校1年生の生活科にはじまり、中学年からの総合的な学習の時間が中学校3年生までつながっていることを強く感じた。

児童生徒は、いろいろな生活経験をしながら、授業の中では目的をもった体験をし、課題に気づき、工夫をしながら解決していく。小学校ではこの過程を繰り返していくなかで、人との関わりを深めたり、情報発信をしたりして力をつけている。そして中学校では、毎日の生活を見つめ、自己を見つめていくことで一人ひとりの人間形成が行われていた。これは、まさに第3回講座の講演会で聴いた「生き方を探究し、実践する時間」そのものであり、総合的な学習の時間の目的を再認識した。中学校では、「課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現→課題設定」とスパイラルで過程が進みながら、自己の生き方を考えさせることが大切であると感じた。

（三豊市：中）

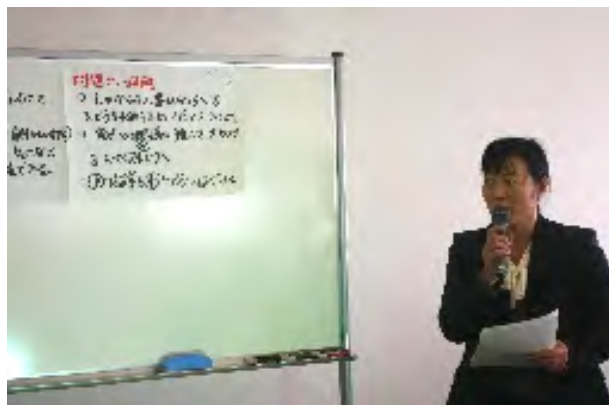
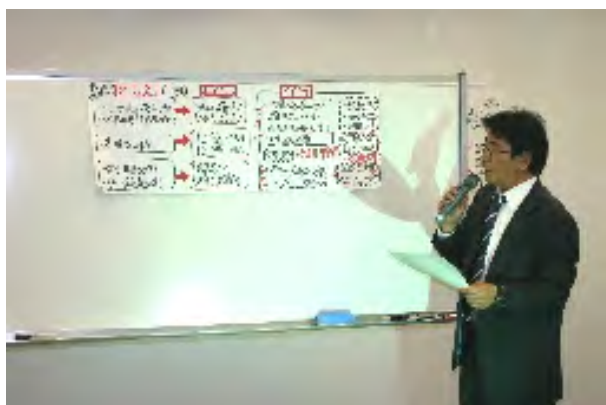
カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 2

前半の「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1」で話し合った内容について全体交流の場を持ち、改善に向けた考え方の共有を図った。また、後半は松本教授より「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割」の講話をいただき、総合的な学習の時間のカリキュラム評価と、新学習指導要領に基づく総合的な学習の時間の改訂の方向についてご指導いただいた。

ここでは、研修の内容と研修を受けての感想等を紹介する。

ワークショップによる研修 2

ワークショップによる研修 1でまとめたものをもとに各班の話し合いの結果を発表する。



各グループごとの発表（左上、右上、左下）

松本教授によるご指導

グループ交流を通して

◇ 個に応じた活動の保障と支援

教科のようにきめ細かな内容や支援が示されていない総合的な学習で何よりも大切なのは、個に応じた活動の保障と支援であり、誉めることの大切さをあらためて実感した。また、改善のポイントである「協同的態度の育成」は、グループ活動を設定するだけでは逆効果になりかねないので、グループ別発表の中にもあったが、子どもが子どもを支える支援をこれからはもっと考えていかなければと感じた。

最後に余談ではあるが、今回の研修で14のグループ別発表が2回あったが、プレゼンの仕方にそれぞれ工夫と個性があって大変勉強になった。総合的な学習の時間の充実は、こういった表現力・説得力の育成にもつながるのではないかと思った。

（高松市：小）

◇ グループ発表から

午後からのこの研修においては、午前の研修会でまとめたものを班ごとに発表し、指導の松本先生からそれぞれにコメントをいただいた。各班から発表される内容やとりのこ用紙にまとめられたものには、班の個性が表れており、内容的に似通ったものもまとめ方によって伝わり方やインパクトに大きな違いがあることに驚きを覚えた。また、指導の松本先生からのコメントも発表の内容に即して的確であり、一つ一つが大変参考になった。

(高松市：小)

◇ 宝物を掘り起こす

研修6での意見交流をもとにした各班からの発表やそれに対する松本先生の助言を聞いて、心に残ったことがいくつかあった。まず一つはカルテとは事例の積み重ねの記録であるが、それを記録することで自分のものの見方が変わっていくということだ。また、カルテを記入する際には主観が大きく入っているが、それを後から見直すことで物事を客観的にとらえることができるということだ。このことは自分自身がカルテを記入して実感したことでもある。またカルテを作るために抽出した子どもたちの中には、教師から見て、めだたない子どもやほめることの少ない子どもが多く見られた。しかしそれらの子どもたちを温かい目でしっかりと見つめ、彼らを核においた授業を考えていくことで、一人一人の子どもの中にある宝物を掘り起こすことができるのだということが分かった。総合的な学習の時間が単なる指示待ちの活動ではなく、子どもたち一人一人が自分の長所を伸び伸びと表現し、自分の夢を実現していくきっかけとなるような時間にできるよう、前向きに取り組んでいきたいと思った。

(さぬき市：中)

◇ 「気になる児童生徒」への支援

それぞれの班から報告された、いわゆる「気になる児童生徒」に対する対策としては、総合的な学習の時間の計画や内容を人との関わりを大切にしたものにしていくことや個の興味に応じたカリキュラムにしていくことなどの工夫が必要であることが考えられる。さらに、教師サイドからは、その児童生徒の生活の背景を考えた上で、支援の先生などの情報交換などの連携による支援の個別化が必要であること、また、子どもサイドからは、その児童生徒の役割を明確にしたり、グルーピングを工夫するなど、子どもが子どもを支えていくような支援が必要であると考えた。

(さぬき市：小)

◇ 「気になる児童生徒」への支援

「地層を調べるときに、何本か試掘して、他の場所の様子を知るように・・・」という話を聞き、なるほど、と思った。最初、2名の抽出児のカルテから、一体何が見えてくるのか分からなかったが、地層に例えた話から、実践に対する子どもたちの反応をかなり深く広く判断・分析できると思った。カリキュラム作りへの手立てとなりうることが分かった。

同じカリキュラムをしていても、一人一人が違う願いを持っている。そんな子どもたちも、友だちと協力し活動しながら、新しい見方や考え方、判断力を身につけていく。重要なのは、その後、自分一人になった時に、どうまとめていくか、だと思われる。差はあっても、それまでに学習してきたことが意味をなすように、形にしていく手助けを考えておかなければならないと思われる。

(丸亀市：小)

◇ ギャップに気づくことが大切

松本先生の各グループの発表のコメントの中に、以下のような貴重な示唆があった。

- ・日本の児童生徒は、自尊感情がとても低い。（誉める・居場所を作る必要性）
- ・教師は、児童の上をいくアイデアを出して興味関心を引きつけなければならない。
- ・教師が聞き役になる。（子どもが主体であり、子どもが資料を集めてくるのが大事）
- ・気になる子を中心とした活動も有効である。（総合的な学習の時間に活躍させ輝かせる）
- ・ある子どもに焦点を当てると計画が具体的になる。
- ・突出して調べ方が上手な子や知識の豊富な子をきっかけにしてまわりに広げる。
- ・個々の児童に対する教師の願いやねらいを持って、総合的な学習を進める。

総合的な学習の時間の学習指導要領の改定について、中教審答申では、「他者と協同して課題を解決しようとする活動」や「言語により分析し、まとめ・表現する問題の解決や探究的な活動」を重視していることを学んだ。また、授業の改善のためには、目標や計画と現状認識を明確に把握して、そのギャップに気づくことが大切であることを知ることができた。

（丸亀市：小）

◇ 自分たちがやりたいことをやれる時間・・・という意識改革

この研修中、3回の情報交換の場があったが、いつも時間が足りなくなるくらいそれぞれが自分の思いや願い、成果や課題などを出し合った。それで、終わりになる研修も過去に経験しているが、この研修は必ずその報告があり、報告の仕方やまとめ方は各グループの特色が表れ、内容だけでなく、多種多様な表現の仕方があることも学ぶことができた。また、発表後には、松本先生が一つひとつ丁寧に説明やコメントをくださり、「わたしたちの話し合いは有意義だった。」という充実感や達成感を持たせてくれたと思った。

現在、学習以前の「話し合いができない」「学び合いができない」など人間関係が築けない子や「継続的なことをやり通すことが苦手」という子が多くなっている。また、従来からある指導計画にとらわれていると、子どもも教師もがんじがらめになるおそれがある。子どもたちが、「総合の時間は、自分たちがやりたいことをやれる時間なんだ」という意識変革ができるように、

- ① 子どもが好きなことを見つけて、好きなことを調べていく中で、学習の方法やコミュニケーションの方法を身に付けさせる
- ② 個のテーマを全体テーマや指導計画とどのようにリンクさせるか、個をどう生かす（活躍の場）かなど、教師が明確な見通しを持って取り組んでいく
- ③ 「内容・教材・スケジュールは柔軟に」の姿勢で、目標と結果のずれをしっかりと把握し年度途中で数回、計画の見直しをする
- ④ カルテ（記録）をとり、「この子の良いところ、問題点は何か」「どのような働きかけをすればよいか」など、個々の子どもへの評価を必ず行う
- ⑤ 地域の人材を活用し、違った目で評価してもらい、個の長所や可能性をさらに伸ばす

など、総合の基本的な考え方について意思統一を図ることが必要であると感じた。

（まんのう町：小）

◇ 総合的な学習の時間の充実に向けて

総合的な学習の時間を進めていく上で、本校の児童・学校・家庭・地域の実態をしっかり捉え、総合的な学習の時間のねらいを達成するために何をしていけばよいかを明確にしなければならない。特に、計画を職員全体で練り、常にねらいを意識した、児童が自己実現できる実践を行わなければならない。また、各学年の学習状況の情報交換を行い、職員全員が各学年が何をしているか知り、学年のつながりも大切にしなければならない。そして、計画を年度途中で必ず見直し、児童の様子やねらいと照らし合わせて修正する必要がある。総合的な学習の時間が充実したものになるように努めたい。

(小豆島町：小)

◇ 計画は破られるためにある！

「計画は破られるためにある」という言葉が大変印象的であった。普段の実践の中で計画に沿って活動を進めることに終始していたことを深く反省した。総合的な学習の時間の「目標」原点に戻って、校内での次年度からの計画を見直したい。また、個々の子どもへの評価、集団への評価、子どもからの評価、教師集団の自己評価、地域保護者からの評価など、多様な評価を通し、多面的に見ることの重要性を学んだ。

本研修で学んだことを基に、校内研修等を積極的に行い、今後の実践に役立てたいと感じた。

(さぬき市：中)

◇ コーディネーターの役割と今後実践していきたいこと

今回の研修を含め、計4回参加して、改めて総合的な学習の時間の大切さを確認することができた。新学習指導要領では、105時間から70時間に削減されているので、今年度内に計画の見直しと、育てたい力の精選などをしっかり行い、より充実したものになるように、コーディネーターとしての役割を果たしていかなければならないと思った。そのためには、地域教材をしっかりと生かして、地域と連携しながら活動できるようにしていくことが大切だと感じた。また、他教科ではなかなか活躍できない子どもたちが、総合的な学習の時間だからこそ主体的に生き生きと活動できるように今後も支援していきたい。

(三木町：小)

◇ コーディネーターとしての役割を果たしていきたい

総合的な学習の時間コーディネーターとして校内体制を整えることがまず大切である。指導事例や先行実践の収集から始まり、基本方針や目標の見直し、地域との連絡調整、校内環境の整備、計画修正のサポートなど、その役割を果たしたい。また、テーマの設定や授業研究の計画、進め方、そして授業観察や授業記録の構成なども主体的に取り組んでいく必要がある。

この4回の研修を通して、総合的な学習の時間の改善の中心となる要素が、探究的な学習を通すことであるということを知った。そのために大切なのが、課題設定を明確化することである。子どもが学びの中心にいて、本当の学びができる子どもを育てるために日常生活と結びつき実生活や実社会に役立つ課題を探ることを大切にしたい。

研修で学んだことを、学校全体として組織的に取り組むことができるよう、コーディネーターとしての役割を果たしていきたいと思う。

(坂出市：小)

個人カルテ (抽出児の指導)

WS 「抽出児の指導」

作成者 ()

抽出児名	とらえ	
	ねがい	
	てだて	

抽出児名	とらえ	
	ねがい	
	てだて	

個人カルテ（抽出児の記録と評価）

WS 「抽出児の記録と評価」

作成者（ ）

	指 導 計 画	抽 出 児 （ ）
4 月		
5 月		
6 月		
7 月		
8 月		
9 月		
10 月		
11 月		
12 月		
1 月		
2 月		
3 月		

総合的な学習の時間の時間の計画作成とその見直し等に関する各校の取組状況

第1回総合的な学習の時間の時間コーディネーター養成講座 資料2

総合的な学習の時間の時間の計画作成とその見直し等に関する各校の取組状況

(集計表・・・回答数76)

1 総合的な学習の時間の担当について

① 総合的な学習の時間の担当は決まっていますか。

	はい	いいえ
小学校	52	0
中学校	23	1
全 体	75	1

② ①で「はい」と答えた学校は、担当が何人で構成されていますか。(平均)

	人数 (平均)
小学校	2.6
中学校	4.1
全 体	3.0

2 総合的な学習の時間の計画作成について

① 次年度の総合的な学習の時間の計画はいつごろ作成しますか。(延べ数)

	前年度途中	前年度末	新年度当初
小学校	2	39	18
中学校	0	19	9
全 体	2	58	27

② ①の計画はどのようなメンバーで作成されますか。(複数回答)

	校長	教頭	教務	現教	学年主任	担当	担任	養護教諭	その他
小学校	16	18	11	8	25	29	40	4	2
中学校	6	6	8	6	14	16	5	1	2
全 体	22	24	19	14	39	45	45	5	4

③ 計画そのものの評価や見直しはどのようにしていますか。(省略)

3 総合的な学習の時間のねらいについて

総合的な学習の時間のねらいや、育てようとする資質や能力を明確にしていますか。

	している	していない
小学校	52	0
中学校	22	2
全 体	74	2

4 校内研修における総合的な学習の時間の扱いについて

① 年間に総合的な学習の時間に関わる校内研修を何回実施していますか。(平均)

	回数 (平均)
小学校	3.2
中学校	2.4
全 体	2.9

② ①で実施している学校はどのような内容について実施していますか。

(上位のみ、複数回答)

	計画の見直	情報交換	事前研修	授業研究	評価
小学校	15	12	9	11	7
中学校	4	2	4	0	1
全 体	19	14	13	11	8

5 総合的な学習の時間の課題について

総合的な学習の時間を進めるにあたって困っていることや課題になっていることはどんなことですか。

(上位のみ、複数回答)

	時間不足	人材活用	活動内容・ 計画	教員数 不足	子どもの 興味・関心	予算不足	評価方法
小学校	13	14	7	9	7	4	6
中学校	8	3	9	4	1	3	1
全 体	21	17	16	13	8	7	7

平成 20 年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
実施報告書

平成 21 年 3 月

編集発行 香川県教育委員会

事務局 香川県教育委員会事務局義務教育課
香川県高松市天神前 6 番 1 号